

特集

近代文明からの解放

ガンジーの思想、インドの共同体運動と我々の接点は何か？

制作前記 ● 中島泉／上野允士

近代文明からの解放 ● 中島 泉

グラムダン・インドの土地革命 ● S・ダダ

サルボダヤと我々の運動 ● 杉山龍丸

SC I 運動とサルボダヤ ● 小林茂夫



1 一九四八年一月、ガンジーは、ヒンズー熱狂主義者の一青年によって暗殺された。この時ガンジーは、七八才であった。彼はその生涯のうち二三三八日を獄中ですごした。南アフリカとインドにおいて、彼の指導した闘争の数が異常に多いことは、一九四六年にインドが独立を獲得するまでの道がいかに困難なものであったかということ、ガンジーの指導が、独立にとっていかに重要であったかを示している。

2 自叙伝の中で明らかにされているように、若き日のガンジーにとって、ジョン・ラスキンの『この最後の者に』との邂逅は、彼の生涯に決定的な影響を与えた。

その本は一度読み出したら、途中でやめられなくなった。それは私の心を捕えた。私はその夜一晩全然眠れなかった。私はこの本に書いてある考えに従って、私の生

活を変えようと決心した。

ガンジーは『この最後の者に』から次の三つの原理を得た。

- 一、個人のなかにある善は、すべてのもののなかに潜んでいる善である。
- 二、すべての人が、彼らの労働から彼らの生計を得る権利をもっている限り、法律家の仕事と、理髪屋の仕事とは同じ価値をもっている。
- 三、労働の生活、すなわち地を耕す者の生活や手工業者の生活は、ともに生きるに価する生活である。

そしてガンジーは、「夜明けとともに立ちあがり、これらの原理を実行すること」に「とりかかったのである」。

一九〇四年、彼はフェニックス農園を作り、この考えを実行に移した。農園では、彼の新聞『インディアン・オピニオン』が発行され、だれもが平等に労働し、同じ賃金を受けとったのである。

また、一九一〇年には、トルストイ農場を開いた。当時、ガンジーは四一才、場所は南

アフリカのヨハネスバーク近郊であった。彼が、この農場に「トルストイ」の名を与えたことは、トルストイの思想へのガンジーの傾倒を示している。彼は、簡単な労働に価値を与える共同生活体の建設を強く望んでいた。それと同時に、この農場の建設は、彼が南アフリカで指導していた非暴力抵抗運動を持続的に展開していくためには、同志たちとの共同の生活を始めるより他になかった、ということも意味している。

3

今回の特集の中心に、我々はガンジーの「ヒンズー・スワラジ」（インドの自治）を据えた。これは一九〇九年、ガンジーが四〇才の年に出版されたものである。小著ではあるが、ここにはガンジーの生涯の行動をつらぬいた思想が打ち出されている。そしてそこには、我々を原点にひきもどし、そこから考えなおすきっかけを与えるような濃縮された思想が表現されている。

我々の生活は、どっちにころんでも泥まみれのきたらしいものであるかもしれない。へガンジーから何を学ぶのか？ という我々の問い自体がなにか白々しいひびきを感じさせられるが、それでも、偉大な思想の息吹き

に触れ、たとえ一時であらうともその中に身をおくことによって、新しい展望と未来への足がかりをつかむことを希望することは許されるだろう。

4

今日、我々の生活は、近代文明という名の「文明」に、その基盤を置いている。

しかし、めざましく進歩したはずの我々、近代文明人は、いったいどれくらい、たった今生きているという、とてつもない事実、気づいているのだろうか。それは、あまりにも当り前で話すに足りない事、そしてひよっとすると抽象的でさえある事のように受け取られているのではあるまいか。

我々はたった今生きている。それは事実であり、しかも「なぜ？」と問う前の、厳然とした、決定的現在なのである。それは不思議な神秘であり、慄然とする驚異ではないのだろうか。

さらに、人は誰もいろいろな意味において、死ぬまで生きていく。死ぬ、否めない事実なのである。それは、どこか遠くに霞んでいる非日常的幻想ではなく、我々の現在の生を、実現せしめているリアリティに他ならない。いくら鬼社長が許可を与えなくても、市役所

近代文明からの解放

——ガンジーの「ヒンズー・スワラジ」から何を学ぶか？

中 島 泉

インドの自治とは？

英国という外国勢力の被支配下にある時、インドの自治を他の言葉におきかえると、インドのおかれている奴隷的状态からのインド解放というほどのことになる。しかし本当に

「ヒンズー・スワラジ」(インドの自治という意味)は、一九〇八年、ガンジーによって、彼と英国にいるインド人のアナキストとの対話の形式で書かれた本である。英領インド帝国が既に確立していた時である。一九四七年、インドは英帝国支配から政治的に独立した。しかし現在でもインドでは、ガンジーの視点において理解されるヒンズー・スワラジの実現のために、サルボダヤ運動(万民の福祉という意味)がヴィノバ・バハヴエを中心として続けられている。そして、ここでは、このサルボダヤ運動に受け継がれているガンジーのヒンズー・スワラジ理解がいかなるものであるのか、そして又、それは、矛盾に満ちた非人間的体制下にある我々自身と、どこでどのようにかわわってくるのかということ、を「ヒンズー・スワラジ」を軸としながら以下にみてゆきたい。

(一) インド支配者である英国をどうみるか
では、ガンジーはインドの奴隷的状态とはいかなるものであると理解しているのだろうか。まず彼が、インド支配の当事者であると思われる英国をどのようにとらえているのかという点を、アナキストと比較してみるところから探ってみたい。
アナキストのみる英国は、インドと較べて、近代文明の発達した羨やむべき先進国と

インドの奴隷的状态の理解

インドを解放する事ができる為には、インドのおかれている奴隷的状态とはいかなるものであるのか、そしてそれはいかなる原因によってもたらされているのかという分析が鋭くなされなければならない。その上で初めて、そのようなインドにおける解放という言葉のもつ内実、方向性が明らかとなってくるのである、その為の適切な方法・手段が理解されてくるのである。インドの解放、インドの自治と言う時、いったい何を指してインドと呼んでいるのかという事が、具体的にとらえられてこなければならないのである。

で印鑑証明を貰わなくても、死ぬ時は、さつさと死んでいってしまうのである。どんな権力であろうとも、それを止める事はできない。このように、我々は、我々の知性や理性や感情を越えた所にある、どうしても否めない事実、人工的権威によつては操作する事のできない、とてつもない現実として存在している。

ところで、我々近代文明人は、自己の存在の基盤をどこに求めようとしているのだろうか。文明人といえども、お腹がすく。ひもじければ、食物が必要である。いくら金があっても、食物や水や空気がなければ、死んでしまふ存在なのである。ところが、我々は金さえあれば何でも手に入るといふ発想を持つのである。現代において至上の価値を持つのは金であり、金を中心とした、金のための生活に、我々は追われている。そこでは利害追求のために、あらゆる種類の搾取、差別が行なわれている。人間の価値は、金に還元されているのである。

しかし、自然は、金に左右されない独自の領分を守っている。いくら土に金を蒔いても、芽は出て来ない。芽を出すには、本当の種を蒔かなければならないのである。そして、時

かれた種は、金欲しさに芽を出すのでもなく、人間が偉いから芽を出すのでもなく、太陽や水や土や風などの、宇宙大の営みの結果として芽を出すのである。それは、ちっぽけな、人間個人の所有物ではないのである。

人間が人間に、そして自然に対して、暴力を加え踏みにじっている今日において、我々が人間であり続けようとするならば、我々は何よりも、人間となる事を学ばなければならぬ。なぜならば、人間喪失の状況の中で、他ならぬ我々自身が、人間本来の感受性を失ない、自分の気づかぬ所で、あらゆる意味での、抑圧的当事者となっているからである。

人間解放、人間の連帯、やさしさの回復をめざしても、まさにそれを防害している所の自己自身の中の盲目性が露わにされ、超えられていかなない限り、それは所詮、己れにのみ都合の良い連帯、暖かさでしかない。その時、相手は人間としてではなく、自己満足のための手段に落としめられているのである。

ここにおいて、人間を、その存在の基盤に帰せしめる為の視点が、鋭く問われて来なければならない。そして、まさにガンジーとの対話において、我々は、我々の置かれている存在状況への、深い洞察を与えられている

のではあるまいか。

5

「ブーダン・グラムダン」運動は、ガンジーの思想と実践の真の後継者といわれるヴィノバの提起した運動である。ブーダン運動とは、地主が土地を寄進し、その土地を貧しい農民に分け与えていった運動である。グラムダン運動とは、ブーダン運動を推進していく過程で生まれたもので、村落全体を共同化し、村の総会を設置し自治を促進させていった運動である。今回訳出した「グラムダン」は、こうしたヴィノバのグラムダン運動の経過をたどったものであり、ガンジーの思想がヴィノバによつてどのように受けつがれていったのかを明らかにするものとして資料的に検討してもらいたい。

6

さらに、日本において実際に、インドのこれらの運動と接触をもつ国際文化福祉協会の活動の内容、ガンジーの思想の影響をうけているというSCIWワークキャンプ運動の内容を併せて報告した。

してとらえられる。そしてその近代文明は、文明としての水準の高きゆえに、インドが模倣するに価するものとして理解されている。たとえば英国議会は、民衆によって選ばれた代表が民衆の監視のもとに機能する、いわば民主的議会制度の母としてとらえられ、それを支えている西欧教育が高く評価されてくるのである。

これに対してガンジーは、逆に、現在の英国は哀れむべき状態にあり、その哀れむべき状態とは、まさにその近代文明化された現状に他ならないというのである。ガンジーが英国議会についてどのような指摘をしているかをみてみよう。

「最もふざかしい人間が人々によって選ばれた事になっています。選ばれたメンバーは無給で俸仕し、それも本当に公の福祉の為のみの俸仕でなければなりません。……しかし実際にはどうでしょう。彼らは偽善的で自己中心的であるという事が普通になっています。……最も重要な問題が議題になっている時も、彼らが伸びをしたり居眠りをしたりするのが見られます。時には聴き手がうんざりするほど話をそらしてしまいます。……彼らは簡単に自分の党に投票します。いわゆる彼らの戒

律に縛られるからです。もし誰かが例外的に独自の投票をしたりすると、その人間は裏切者とされるのです。」「(ヒンズー・スワラジ) 三二―三頁)

議会はさらに売春婦に例えられている。「議会は本当の主人を失なっているのです。首相を中心としたその活動は、規律正しいものではなく売春婦のように荒れているのです。首相は議会の繁栄よりも自分の権力の方に専念しています。彼のエネルギーは、自分の党の成功を保障させようというところばかりに注がれています。」「(三二―三頁)

さらに、このような議会をもつ英国の人々については、何と言っているだろうか。

「英国の選挙民にとっては、新聞がちやうど聖書のような役割を持っています。彼らは新聞から手懸りを得るのですが、その新聞がまた不誠実なのです。同じ事柄でも新聞によって異なった解釈がつけられ、それもその新聞の属している党の利益に沿うようになっているのです。……(このような新聞を持つ)人はよく意見を変えます。彼らは七年ごとに意見が変わると言われています。……彼らは力強い演説をする人や、よくパーティーや接待をする人間に従っていくことになるで

しょう。」「(三三―四頁)

このように、ガンジーからみた英国は誠実さと、生きた良心を喪失した状態にあり、これを彼は哀れむべき状態と呼んだのである。そして、「それは英国人だけの特殊な欠陥によるものではなく、近代文明によってもたらされたもののなのです。近代文明とは名ばかりの文明であり、その文明のもとでヨーロッパの国々は日一日と墮落し、破滅していつていくのです。」「(三四頁)」という理解を示している。

(二) このような英国がなぜインドを奪い、支配し続けているのか

それでは、ガンジーに言わせるとこのようにひどい状態に陥っている英国が、なぜインドを奪う事ができ、さらに支配を続けていられるのだろうか。

アナキストにとって英国は、あくまでも一方的にインドに侵入し、インドを奪った憎むべき敵としてとらえられている。しかしこれに対するガンジーの考え方は次のようなものである。

「英国がインドを奪ったではありません。我々がインドを彼らに与えたのです。彼らは彼らの力の故にインドに居るのではなく、我

々が彼らを留めているのです。彼らはもともとと商売を目的としてこの国にきました。ビハドール会社社の事を思い出して下さい。……会社社の役人を手伝ったのは誰でしょう。彼らの銀を見て誘惑されたのは誰でしょう。彼らの商品を買ったのは誰でしょう。歴史は、これらの事をしたのは皆我々であることを証明しています。(インドの封建的小国の)諸侯が仲間同志で争った時、彼らはビハドール会社社の援助を求めました。その協力関係は、商売にも戦争にも同じく精通していました。それはモラリテイ(倫理)の問題によって防げられる事はありませんでした。目的は通商を増加させ金を儲ける事にあつたのです。……又ヒンズー教徒と回教徒は激しく敵対していました。これも会社社にチャンスを与え、このようにして会社社がインドの覇権を握る状況が我々自身によって作られたのです。ですからインドは奪われたというより、我々がインドを与えたという方が真実なのです。……そして彼らにインドを与えたと同じ理由で彼らが居すわっていられるのです。多くの問題も、金が英国人の神であるという事を思い出せば解決がつくのです。そしてそれは、我々が我自身自身の卑しい自己利害から英国をインドに

留めているのだという事を意味するのです。」「(三八―四〇頁)つまりインドの被支配化は、相手が悪いのではなく、インド自身の責任という事になるのである。そして、もし他ならぬインド自身の中に、英国による被支配化をもたす要因があるのだとすれば、今度はインド自身に眼を向けて、その現状をさらに深く分析していかなくてはならない。

(三) インドの現状

「それは悲しむべき状態にあります。……これは熟考した上での意見ですが、インドは英国によってではなく、近代文明によって踏みこみこまれていくのです。」「(四一頁)すなわちガンジーにとって、インドの奴隷的状态とは、インドの近代文明化された現状としてとらえられている。アナキストにとってのインドの奴隷的状态とは、

「英国政府によって毎年金を絞り取られて貧困化し、重要な政治的地位を剥奪され、彼らの横柄な態度によって感情を踏みにじられる事。」「(二九頁)」を意味していた。しかし、もしガンジーの言うように、当の英国自身がその近代文明化によって哀れむべき状態にあり、

そのような英国がインドに入り、留まっている原因がインド自身の近代文明化にあるのだとすれば、そして、それこそがインドの陥っている恐ろしい奴隷状態であるとするならば、我々はここで、ガンジーが近代文明をどのようにとらえているのかという事を理解しなければならぬ。そして、それはとりもなおさず、ガンジーのみるインドの奴隷的状态とは具体的にどのような事態を意味しているのかという理解につながり、さらには、今日、近代文明の真只中でその矛盾や疎外性を感じながらうごめいている、我々自身の存在状況の理解にもつながってくる事なのである。

(四) ガンジーから見た近代文明の本質 人間の被奴隷化現象

「まず最初に、どのような事が『文明』という言葉で示されているのかという事を考えてみましょう。この『文明』の基準は、そこに生活している人々が肉体的・安楽を人生の目的としているという事実を表わされています。いくつかの例を見てみましょう。……以前ヨーロッパでは人々は主に手足の筋肉労働で土地を耕しました。今では蒸気エンジンで一人の人間が非常に広い土地を耕す事ができ、巨大な富を貯える事ができます。これが文明の

印だと言われているのです。……以前人々は、荷馬車で旅をしました。今では汽車に乗って一日四百マイル以上の速さで飛んでいきます。これが文明の高さであると考えられています。……あらゆる事すべてが機械で行なわれるのです。以前、闘いが行なわれる時には当事者同志が体力を直接に競い合ったのです。今では一人の人間が丘の陰から何千という人間を銃で殺す事ができるのです。これが文明だと言います。以前は人々は屋外で好きなだけ働きました。今では何千という労働者が、生計のために工場や鉱山と一緒に働いて働いています。彼らのおかれている状況は獣よりもひどいものです。彼らは生命の危険を犯して最も危険な職業にたずさわって、大富豪の為に働くことを強いられるのです。昔は、人々は肉体的強制のもとに奴隷化されていました。今では金と、その金で手に入れられる享樂の誘惑のもとに奴隷化しています。以前夢にも考えられなかった病気が今では発生し、大勢の医者がその治療法の発見の為にやっつきとなり病院も増加したのです。これが「文明」の試みなのです。……「文明」は肉体的安樂を追求していますが、はじめにもその事にさえ失敗しているのです。」(三五―三七頁)すな

わちガンジの持つ近代文明像とは、肉体的安樂を目的とし、その為の機械が登場し、人は自らの手足を使わなくなり、お金儲けに狂奔し、しかも皮肉なことには、かえって不健康な状態を引起こして、肉体的安樂を得る事からさえ疎外されているというものである。そして最も致命的な事は、人々がこのような文明を全く素晴らしい、善いものと信じて疑わないという事にあると指摘するのである。ガンジにおいてこのような近代文明は、表面的には我々を良い気分になだめすかし、それを全く素晴らしいものと信じ込ませながら、その実、我々が気づかぬうちに我々自身を非人間化し、自己破滅に導く悪の本性を内在させた恐ろしい迷信として危機的にとらえられているのである。では、この近代文明に内在するという悪とは、いかなるものであるのだろうか。ガンジがインドにおいて、どのような現象をその具体的表われとみているのかという事を通して、その悪の内実を探ってみよう。

がもたらす諸害の中でも一番深刻なのは、それまで地方分割的ではありながらも、その生き方において一つであったインドが鉄道の利用によって逆にバラバラになっていく事であると指摘する。では一つであった生き方とは何か。それは、神を礼拝して生きるということでの一致であるという。それでは、ガンジの指摘する神とはどのようなものであるのだろうか。これは、ガンジが宗教をどのように理解していたかという彼の言葉から(又彼の生き方全体から)ヒントが得られる。アナキストは、ヒンズー教徒や回教徒が互に対立しあっている現在のインドが一つになることは不可能ではないかと考える。これに対するガンジの考えは次のようなものである。

なる道を通るからといって何が問題なのでしょう。」(五〇頁)

「……ここで私はヒンズー教や回教やゾロアスター教の宗教の事を考えているのではなくて、すべての宗教(宗派)の基盤をなす宗教のことを考えているのです。」(四一頁)

ガンジの言う宗教とは、教条主義的抽象的宗教ではなく、たつた今生きてあるという、一見あまりにもあたりまえな故に最も気づき難く又それ故にそれと知らずに抽象化概念化されやすい一点が、なまなましい覚醒をもつてとらえられるところから出発している。そしてその事実認識がさらに深められ、我々の一呼吸づつを支え、あらゆる存在を貫いている深い存在事実があるのだという事を、自らの経験を通して理解していくところにあるものなのである。

「事実、人間の数だけの宗教があるのです。」(四四頁)ガンジにとつて人間の存在は、存在するということその事自体においてすでに宗教的なものとしてとらえられているのである。宗教は、決して人間の頭の中で構築された排外的論理にあるのではないのである。それは我々の肉体的、知性的機能を支え、かつそれを超えて我々人間、そして他のあらゆる存在

全体を包み込んでいる深みなのである。そしてガンジの意味する神とは、まさに自己存在を掘り下げていく中において出会う、この存在の深みであった。彼にとつて神、存在の深みは抽象概念ではなく、リアリティ(真なる事実)であり、ぶん殴られたら痛いと感ずるように、重い存在としてとらえられている。では、地方分割的相違にもかかわらず、このような意味での神礼拝においてインドは一つであったとは、どういう事なのだろうか。それは、このような深みとのかかわりにおいては、存在現象の様々な様相は、それ自体絶対化、権威化されるものではなく、存在を支持している深みの様々なる表象として象徴的に理解されてくるという事なのである。しかしそれは、相対化という名のもとの自己絶対化に陥るものであってはならない。深みとのかかわりにおいて、常に現在の自分が破られるのりこえられて、さらに存在の深みの中に開かれていく、絶えざる自己否定の生き方が要求されてくるのである。その時に、深みにおいて存在上の様相の違いを越えて、相手と出会う事が可能となるというのである。

したがって、ガンジのナショナリズムの基盤は、宗派的、人種的、地理的同一性にあり、

るのではなく、人間としての根本における共通の生き方であり、人間として根本的に共通な生き方とは、一人一人の人間がどれだけ自らを支えている存在の深みに目を開いて生きているのかということにあったのである。

では、鉄道が入ってくると、なぜインドはバラバラになったのだろうか。ここで、ガンジが、深みとのかかわり、人間としての生き方という言葉によって、具体的にどのような事を指しているのかが明らかになってくる。「我々が直面している困難は、我々自身が作り出したのです。神は人間の肉体構造に、移動能力の限界(Limit)を与えました。人間は直ちにこの限界をのりこえる手段を発見しました。神は人間が、その存在の深みに開かれるようにと知性を与えました。人間はそれを乱用して自らの深みを忘れました。私は私のまわりに直接居る人々にのみ奉仕できるのであって、世界中の人々に奉仕できると考えるのは、空想にすぎないのです。このように不可能な事をしようとすると、様々な異なった事象や宗教に出食わして混乱が起こるのです。このような事から、鉄道はとても危険な機関であるという事は明白でしょう。鉄道によって、人間は深みから疎遠になっていってし

まったのです」(四八頁)

つまり、人間を人間として存在せしめている深みとのかかわりを通して、人間には限界が与えられているのだということが鋭く意識され、しかもこの限界は、人間が人間であり続ける為には厳しく、そして謙虚に守っていかなければならないのだという生き方が提示されてくるのである。そしてその限界とは、例えば人間の手足の運動量の限界でもあれば、精神活動の限界でもある。そしてこの限界を超えたところに誤解や戦争という混乱が起きてくるのである。鉄道はそのスピードにおいて、行動半径において人間の手足そのものの限界を越えている。そしてそれは限界を越えた精神活動を人間に強いる事になる。自らのおかれている場での深みにおける経験がなされる事なく、やたら動き回って地方的・宗教的差違などに直面すると、それらの差違は、的確な理解の基盤の欠如の故に、それ自体において絶対化してとらえられ、今度はその差違が基準となつて、人間、その他の存在が逆規定されてしまふのである。ここにおいて、人々の意識も現象的差違によつて規定され、相手は自分とは相入れない存在として理解し、そこに分裂、差別、対立が起き

てくる。ガンジーはこの状態を混乱と呼んだのである。

では、この限界を守つた時はどうなるのだろうか。一人の人間が限界内で接する事でできる人間は、量的には限られてくる。しかし、自分のすぐ隣にいる人間と、深みにおいて出会つていく事は無限の重さを持ち、一人一人が自分のおかれてある場においてこの出会いをつくりだそうとすることによつて初めて、無益な混乱が避けられ、本当の意味での世界平和への足がかりができるというのである。

このように、鉄道一つの例をとつてみても、人間には人間として守るべき限界があり、それを犯すことによつて、人間は互に差別しあい、疎外しあう存在になるという事が指摘された。限界を無視し、超えることによつて、それを行なう人間自身が非人間化していくというのである。

それはなぜだろうか。ガンジーは、人間が人間である所以、すなわち人間性の原点を、リアリティとしての存在の深みにみている。人間の持つ限界も、この深みから与えられた人間としての印であつた。したがつて、この限界に無知であり、それを超える事は、この人間性の原点から自己自らを、それと知らず

に疎外していく事に他ならないのである。そしてガンジーは、人間として守るべき限界を無視し、深みにつながる人間性を否定することこそが暴力であると理解したのである。

しかし、ここで我々は次のような質問を提出したくなる。いったい存在の深みとリアリティとは、どこにあるのか。人間の限界といつても、どこまでが、そして何が人間であるために守らねばならない限界なのか。そしてどうやってそれを見つけていけばよいのか……

我々近代文明人においては物質のみがリアリティであり、存在の深みなどという事が非科学的迷信、あるいは単なる抽象概念として受け取られる。又、人間の限界などというものは、それをのり越える事こそが進歩であり、人間の印であるとみなされているのである。すなわち、何を本当のリアリティとみるかという事、何を人間存在の原点とみるかという事が決定的に相違しているのである。そして便利な機械が発達し、合理化が進み利潤が追求され、GNPが上昇し、我々は少しは幸福に、つまり肉体の安楽度が増したように思っている。

しかし、現実をよく見てみると、一部の人間が楽をするために、より多くの人間が非人間的情況の中で働くことを強いられ、安楽を

楽しむ人間自身も美食、飲食、過食、運動不足その他の不健康に虫食まれている。貧者も富者も常に金のために追いつたてられ、不安や不平、責任のなすり合いは停まることを知らない。現在では、肉体の安楽どころではなく、人類全体の生命そのものが脅やかされる危機的公害現象が生み出されているのである。いつたい、このような人間否定の悪循環はどこからきているのだろうか。

ガンジーに言わせると、それはまさに、最も具体的・直接的であるはずの存在の深みからの、我々自身の疎遠化が原因なのであり、しかも我々自身がそれに気づかないところに、致命的要因があるという事になるのである。人間の限界の無視超脱がその証拠である。

そしてガンジーの指摘する近代文明の本質、その悪の本性とは、我々自身のリアリティへの無知であり、無知からくる人間存在そのものの暴力的否定を意味していたのである。近代文明が、自己破壊をもたらし暴力として、ガンジーによつて危機的にとらえられた理由は、ここにあつたのである。

ここにおいて、ガンジーがどのような状態

を奴隷状態と呼んでいたのかということがわかつてくる。それは、アナキストの指摘したような外国勢力の支配による物質的不自由

さ、感情的不快感にとどまるものではなく、むしろ、そのような事態を現象せしめる原因としての、存在の深みからの人間の疎遠化であり、この疎遠化自体に気がつかない、リアリティへの全くの無知状態を指していたのである。そして、これを奴隷的状态と呼ぶならば、インド人だけでなく、英国人も、そして他ならぬ我々自身も奴隷に他ならないという事になるのである。

解放・自治という言葉の意味する事

インドの陥っている奴隷状態を以上のように理解した時、インドの自治について、ガンジーはどのような言葉で語っているのだろうか。「もし我々が以上の事柄を心にとめるならば、我々が自由になればインドも自由になる事がわかるでしょう。そしてここに自治の定義があるのです。我々が我々自身を支配する事を学んだ時が自治なのです。ですからそれは我々の手の中にあるのです。……しかしこのような自治は一人一人の人が自分で経験しなけ

ればならないものです。自分自身が溺れかかつている人は、決して他を救う事はできません。我々自身が奴隷であるのに、他を解放しようとするのは、本当は不可能な事なのです。我々は、英国を追い出す事を目標とする必要はないという事が、もうわかつたでしょう」(六五頁)

つまり、インドの解放と言つた時、解放されねばならぬインドの実体とは、真実の深みに対して無知に陥つたインド人一人一人であり、自治とは、そのようなインド人一人一人が、深みに陥り、人間として守らねばならない限界に目覚め、その規律のもとに自らをコントロールして従わしめる事を学んだ状態として理解される。ガンジーの意味する自治とは、一人一人の人間の、一人一人の自己存在の深みにおける自己支配の獲得であり、それは人間一人一人の自らにおける人間性の回復を指していたのである。したがつて、本当の自治は、単に英国を追いつて完成するものではないのである。そして、解放を必要としているのはインド人だけでなく、我々自身一人一人であり、インドの自治とは英国の自治でもあり、他ならぬ我々自身の自治の問題でもあるという事になるのである。

インドの自治獲得の手段

(一) 個のレベルでのあり方

このような自治とは、どうしたら達成されるのであろうか。我々は、ガンジの言う存在の深みも実感できず、人間として守るべき限界もピンとこない。

アナキストはここでもまだ英国を暴力によって追い出す事を提案する。しかし、ガンジが提案する手段とは、実に「自己犠牲」なのである。このような考えは、いったいどこから出てくるのであろうか。彼はアナキストにむかって言う。

「あなたは政府の支配権力を自分の手に握りたいのではなくて、インドの何百万という人々にしあわせになつてほしいのでしょうか？もしそうならば、我々は唯一つの事だけ考えればよいのです。——どうしたら何百万もの人々が自己支配を獲得できるのか……私の愛国心は、英国が退きさえすれば人々がインド諸侯のもとに抑圧されてもかまわないというものではありません。……私の言う愛国心とは、全ての人々の福祉を意味しているの

あり、もしそれが英国人の手で保障できるのなら、私は彼らに頭を下げましょう。もし暴政に抵抗し、土地に奉仕し、インドの自由を守る為に生涯を捧げた英国人であるならば、私はその英国人をインド人として迎え入れます。」(六八頁)

アナキストはしかし、さらに反論して、目的さえ良ければどのような手段を使つてもよいではないかと言う。これに対してガンジ

「手段を種に、目的を木としましょう。手段と目的の間には、種と木の関係と同じように隠れたつながりがあるのです。」(七一頁)

「もし私が罰が恐ろしいから盗みをやめたとしても、その恐れがなくなつたらすぐに盗みを始めるでしょう。これは一般的に経験されている事です。我々は、力によって人に何かをやらせる事ができると憶測するから力を使うのです。」(七〇頁)ガンジは、手段は目的と不可分に結びついており、手段として力を使う事は、本来の目的達成、本当の問題解決にはならないと理解する。盗みの場合も、決して盗みの本当の動機が力によって取り除かれるとはみないのである。

逆にいえば、手段は目的によって規定され、

手を判断し、判決を下しているのだという自分自身の中の恐るべき暴力に耳を澄まそうとする事から出発して。

幸いな事に、まだ我々には非人間的である事と、そうでない事を見分ける感受性が少しは残されている。ほんのかすかではあるが、深みと我々の接点である良心が、漠然と感じられる時がある。ガンジは、この接点における自分自身への促しこそが、深みにおける自己支配への鍵であるという。この接点に感じられる引力に、耳を澄まさなければならぬと言ふ。そして自己犠牲とは、この良心に一致しない事に従う事を断固として拒否することを意味するのである。しかしそれは決して相手を暴力的にやつつける事を通しての拒否ではない。良心に反する命令や法律を実行せず、しかもその不服従の結果として与えられる処罰を甘んじて受ける事を通しての拒否抵抗なのである。たとえその結果、牢屋に入れば本當の法律、本當の権威あるリアリティとは、深みから来る促しであり、この促しに断固として従つていく事を通して、人間は初めて人間となつていくのである。

それは決して臆病なのではなく、人を殺す

しかもその目的が真理に適うものであれば、その為の正しい手段は決して暴力ではないという事になるのである。では、何が正しい手段かという点、それは真実の力、魂の力、愛の力のみと言うのである。

ここで、ガンジが何を暴力とみていたかという事を思い出してみよう。ガンジの言う暴力とは、深みからの疎外であった。別の言葉で言えば、人間として守るべき限界を無視し、肉体的・感情的安楽を追求する自己利害心に他ならなかった。相手の為を思つて怒ると言つた場合にも、怒りの感情そのものがすでに、自分自身では気づかない程に根深い自己利害中心性から生まれる感情であり、相手の為にとつて正当化しても、それは所詮自分の中に生まれた不快な感情の発散作用にすぎないのである。

では、真理に適つた目的とは何であらうか。ガンジにおいてそれは、必ず存在の深みに人間が立ち帰り、本来の人間性を回復する事につながっているものである。そしてそのような目的を実現させようとする時、本當にふさわしい手段とは、深みから疎遠な自己自身を絶対化し、それを肉体的・感情的に相手におしつける事ではなく、まず自分自身が深み

よりも無限に勇気の要する事であり、自己破壊ではなく、本當の自己理解をもたらしものであるというのである。そしてこの接点としての良心は、人間である限り一人一人の人間に与えられているリアリティであり、外的な権威・権力によるのではなく、何百万という貧しいインド民衆が自己自らの存在において自己支配を獲得する事を可能とするというのである。

ここでは、全く妥協の余地のない生き方が要求されてくる。常に死を胸に抱きながら、その死をも越えて自分のいのちを支えている深みの力にすべてをまかせていこうとする生き方である。そして、このような生き方が人によって実践される時にのみ、本當の自治が実現するのだというのである。そこにおいて人々は、もはや外的権威によって束縛されないのである。なぜならば、外的権威の要求が、人々の内的権威と一致しない時、人々は外的権威の要求に従う事を拒否するのであり、死をも超えた深みにおいて自己の存在を見いだす人々には嚇しとしての処罰もその本来の意味をなさないからである。そして、外的権力とはまさに、被支配者、服従者の存在によって支えられているものであり、被支配者が、

の中に開かれ、深みによって破られなければならないのである。深みの力によって自分が破られた時に、その深みの力は相手にまで届いていくというのである。深みからくる力は、自分自身をも、相手をも祝福する力なのである。そしてこの深みの力を、ガンジは真実の力、魂の力、愛の力と呼ぶのである。

ガンジは、深みに帰つて行く為の手段は、自己存在における深みの経験そのものであると言ふ。そして、自治を、深みにおける自己支配と理解した時、この自治を獲得する手段もすでに深みとのかかわりにおける自己調制の実践にあつたのである。そして深みにおける自己支配を自らにおいて実践し、経験するジャンプ台として、ガンジは「自己犠牲」という手段を提示したのである。

ここで我々のはや、責任を他人になすりつけ、自分だけは第三者的批評家のような顔をして逃げ廻っているわけにはいかなくなる。我々の一人一人が、深みに向かつての絶えざる自己否定の闘いを開始しなければならぬ。まず深みとは何であるのか、本當の自分とは何であるのかと問ふ事から出発して。そして、自分自身では全く気づかない所で中途半端な自己を絶対化し、絶対化した自分を基準に相

外的権力への協力を中止し、その要求への不服従を通して支配される事を拒否した時、外的権威は、その機能を失なうからである。しかし、いったいどうやったらこのような生き方ができるというのであろうか。

「私は多くの経験を通して、国に奉仕する受動的抵抗者になりたい人間は、完全な純正を守り、貧正を身につけ、真理に従い、勇敢さを修業しなければならぬと考えます。」（八四頁）動物の激情（情欲・怒り・憎しみ等）に流される人は、なくてはならない堅固さを身につける事はできない。貧正といつても、持っている金を全部捨て去る事を要求しているのではなく、金銭に対する執着心を捨てる事が大切だということである。又、どんなことがあっても真理に従い、生命を救う為の嘘でさえも正当化されてはならないし、私的所有物、誤った名誉、政府の権力、肉体の損傷、そして死、というあらゆる恐怖からも自由になるような修業をしなければならぬのである。

しかし、我々はそれほど強い人間ではないのではなからうかという疑問が出てくる。それに対してガンジーは、次のように言う。

「自然は、未熟な人間が会出现うどのような困

難や災難とも闘える能力を、人間に与えているのです。」（八五頁）そして実際にガンジーは、自らにこの実践を課したのである。

そこには、深みにむかつての自己支配が、人間としての義務であるという理解があり、この義務の実践を通して初めて人間としての権利が生まれてくるのだという考え方があり、そして、ガンジーの意味する人間としての権利とは、深みからの促しに忠実であらうとする事であるように思われるのである。

(二) 集団のレベルでのあり方

人間は、しかし一人だけでは生きてゆけない。当然そこに、ガンジーの理解するようなインドの自治を可能とする社会形態が考えられなければならない。

「この力をもたらす為には、あらゆる意味でのスワデシ（国産品奨励という意味）が必要なのです。」（一〇四頁）この力とは、魂の力の事であり、個のレベルでのスワデシとは、魂の力による自己支配に他ならなかった。そして、ガンジーの場合、社会集団生活におけるスワデシにおいても、常に集団の中の一人、一人の個にその鍵を置いていた事を忘れてはならない。つまり彼の出发点は、常に個とい

紙十五—四—二五

このように、機械を人々の血の代償としてはならないという、人間として守るべき一線が、きびしく意識されているのである。

各村は又、各自で学校、公会堂、劇場などをつくり、井戸やタンクで水利を整え、教育は人格教育としての基礎課程を義務とするといったものである。

しかし、インドの村人達は、いったいこんなに金のかかる事ができるのだらうかと我々は疑問に思う。しかしその心配は無いのである。なぜなら、村の活動はすべて協力・奉仕によって行なわれるのが原則だからである。

そこでは、金を儲ける事が目的なのではなく、自らが無報酬で奉仕する事を通して、本来の人間としてのあり方を学んでいく事が目的なのである。

なぜそのような事ができるのであろうか？ 材木や食物や道具類、それに労働力も、皆自分の物であるのに、無料で与えてしまうという事は、我々にはとてもできない事に思えるだらう。しかし、それらを自分の物と思う事自体、いや、この世の中に自分の物と言えるものがあると考える事自体、すでに疎外された思考なのである。そもそも「自分」とは何

う具体的存在における深みとの出会いにあったのであり、究極的目的も、実はそこにあつたのである。したがって、あくまでも個を基盤とするこのような視点から要求される社会生活形態も、やはり深みからくる法律にのっとっていなければならない。そして深みからくる法律とは、他ならぬ非暴力（アヒムサ）であり、人間としての限界の厳守であつた。

このような視点から見た時、まず第一にガンジーが指摘する事は、あらゆる機構・組織の地方分散化である。なぜならば、組織や機構の中央集権化が可能である為には、必ずそれだけの外的強制力が必要であり、この外的強制力の表われとしての搾取は、暴力そのものに他ならないとみるからである。そして、ここでガンジーの意図している事は、だからといって地方において異なった政治組織、経済機構を確立しようという事ではなく、実は、組織・機構は、あくまでも個としての人間が自らの中に自治を獲得していくのを助ける、一つの契機としてのみとらえられていかねばならないという事なのである。ガンジーの本当の目的は、深みからくる、開かれた無政府状態（enlightened anarchy）である事を忘れてはならない。

者であるのか？ 「今、生きている」という

事実は、いったい何を語っているのだらうか。

ガンジーは、すべては深みにおいてつながっていると言う。すべては、自己自身さへも、深みから生まれ、深みによって支えられ、そして深みに帰っていくのである。そこでは、何か特別に、自分の物として隔離されねばならぬものは、一つもなくなるのである。そこにガンジーの「信託」(Trusteeship)という理解が生まれたのである。そしてこの「信託」という理解において、ガンジーは、本来の人間の姿としての協力・奉仕というあり方を提出した。もちろん時には不祥事も起きるであらう。ガンジーの言う不祥事とは、あらゆる意味での暴力である。そしてその時に、村人一人一人に要求される事は、自己犠牲を通しての、その暴力的事象への不服従、非協力の実践なのである。

アナーキスト——これはいへんな事です。ね。いったい、いつ全員がそれを実行するんでしょうね？

ガンジー——あなたはまちがっていますか？ 他の方がどうするかという事は、あなたと私には関係ありません。もし私が自分自身の義務を遂行すれば、すなわち、私自身に

奉仕すれば、私は他の人々に奉仕する事ができるのです。他の人がやった時に自分もやるというのは、怠慢さを弁解するのと同じ事なのです。正しいと思った事であるならば、まず自分自身が実践しなければなりません。そしてその実践を見た時に、他の人々もやり方を学んで実践していくようになるのです。

× × ×

『普遍的な、そしてすべてに内在する真実の精神に直面するためには、人は最も微々たる創造物をも、同一のものとして愛することが可能でなければならない。』

あらゆる生命を持つものを同一視することは、自己浄化なしには不可能である。自己浄化なしに守られた非殺生の法則は、虚しい夢にとどまってしまわなければならない。

私自身を無に帰せしめなければならない。

人は自由意志から、自分を同胞の最後の列に置くようにならない限り、救いはない。

読者にしばしの別れを告げるに当たって、真実の神に対する、思想、言葉、そして行為における非殺生の恩恵を与えたまえ、とのわたしの祈りに、ともに加わっていただきたいと思う。』ガンジー（「自叙伝」より）

ガンジー略歴

一八六九年 インド西部アラビア海に臨むボルバンドルで生まれる。

一八八二年 カストウルバと結婚（一三才）

一八八八年 弁護士の資格を取るために英国へ留学。（一九才）

一八九一年 資格を得て英国から帰国。すぐに弁護士業をはじめが失敗。（二二才）

一八九三年 インド商社の顧問として南アフリカへ行く。以後二二年間にわたって南アフリカに住む。（二四才）

一八九四年 差別された南アフリカのインド人のために活動を始める。（二五才）

一九〇四年 ラスキンの『この最後の者に』を読み、農園を開き、肉体労働の生活を始める。（三五才）

一九〇九年 『ヒンズー・スワラジ』インドの自治の出版。（四〇才）

一九一〇年 トルストイ農場を開く。（四一才）

一九一五年 二二年振りにインドに帰国。（四六才）

一九一九年 ローラット法反対の運動を起す。（五〇才）

一九二〇年 全インド自治連盟議長。（五一才）

一九二一年 イギリス製織物の焼払い運動を起す。（五二才）

一九二五年 全インド手紡ぎ協会設立。（五六才）

一九二八年 『南アフリカにおける非服従運動』を出版。（五九才）

一九二九年 反英非服従運動が始まる。（六〇才）

一九三三年 不可触賤民解放運動の会を設立。機関紙『ハリジャン』を創刊。（六三才）

一九三四年 暗殺をはかれたが、未遂。（六五才）

一九四〇年 個人的非服従運動を指導。（七一才）

一九四一年 『インドの統一』出版。（七二才）

一九四六年 インド独立。

一九四七年 国民会議派と決裂。（七八才）

一九四八年 一月、ヒンズー熱狂主義者によって暗殺される。遺灰はガンジス川に流される。（七八才）